

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない」

——『道草』論

佐 藤 裕 子

序

漱石は自分の身近な人々や身辺の出来事を小説に取り入れることの比較的多かった作家である。例えば森田草平は、『吾輩は猫である』第三章において「月並」の定義を質問する苦沙弥夫人の様子や、苦沙弥とのやりとりが鏡子夫人を彷彿とさせるものであることを、「最後の一句を耳にする時、私は此細君の声の色まではっきり分るような気がする。それ程真に迫るものがある」と語っている。

また『門』十八章から二十一章までの参禅の場面には、明治二十七年十二月暮から翌二十八年一月七日まで菅虎雄の紹介で鎌倉の円覚寺塔頭帰源院での自らの参禅体験が反映されている。さらに『彼岸過迄』『雨の降る日』に描かれた「宵子の死」とその死をめぐる家族の様子や、通夜、葬式、骨揚げの様子は、明治四十四年十一月

二十九日の漱石の五女ひな子の急死と重ね合わせられ、同年十一月二十九日、三十日、十二月一日、二日、三日、四日、五日付の日記の記述と符合する。これらは漱石の周囲の人々の具体的な証言の残っているものか、あるいは作品の記述と日記とが殆ど一致する場合なのであるが、他にも読者が「坊つちやん」の「おれ」が赴任する「四国辺のある中学校」を、漱石が赴任した松山中学と重ね合わせる事が可能なように、漱石の現実の体験、あるいは伝記的事実が作品の素材として反映された作品は多い。

『道草』の場合も同様で、従来漱石文芸の中でも極めて自伝的要素の強い作品という位置づけがなされてきた。確かに留学経験者である健三、その健三の幼少時の記憶、「遠い所で極簡略に行はれた」(二十五) 健三とお住の結婚式、養父母との確執、姉の家の古ぼけた額と喘息のこと、妻お住との日常など、作品に描かれたそれらの

いずれもが漱石の体験であつた。健三が留学経験者であることは「遠い所から帰つて来」(二)たこと、「遠い所から持つて来た」「山のやうな洋書」(二)、「外国」(四)(五十八)、「洋行」(十七)などの言葉から明らかである。さらにそれがイギリスであつたことは「五磅のバンクノート」(五十九)から推測できる。現実の漱石の英国留学は明治三十三年九月八日から明治三十五年十二月五日までのことであつた。また健三が島田夫婦と過ごした時期の回想は、八章、十五章、三十八章から四十三章において語られるが、とりわけ四十三章での島田とお常の諍いについては、明治四十五年五月以降の日記断片の「それは僕の幼少の頃であつた。自分ではいくつ位か分らないが勘定して見る」と六七歳の時の事である。僕は父と母と喧嘩する声で毎晩眼をさました」という記述と一致している。また健三とお住との結婚式については三十五章で語られるが、これは明治二十九年六月に漱石と中根鏡子が熊本で結婚式を挙げたことと一致する。また養父母との確執、とりわけ二十七章で明らかになる健三の復縁を願う島田の要求とその顛末については、明治四十二年四月十一日の日記の「塩原が訴へるとか騒いで居るといつて高田と兄が来る。何の意味か分らず。没常識の強欲ものなり。情義問題として呈出せる出金を拒絶す。権利問題なれば一厘も出す気にならぬ故也。自分は自分の権利を保持する為に産を傾くるも辞せず。威

嚇に逢ふては一厘も出すのは御免なればなり」という記述と一致する。姉の家の欄間にかかっている「筒井憲」(四)の額と、姉の喘息については四章、二十四章から二十六章、さらに六十六章から六十八章において語られるが、これは明治四十四年五月十九日付の日記に喘息の姉を見舞いに行つた記述と一致する。さらに妻お住との日常について、とりわけお住が「用事の外決して口を利かない女」(二)であること、「よく寝る女」(三十)であること、またヒステリーの発作の様子の三つのエピソードについては、相原和邦氏の詳細な比較研究がある。氏は大正三年十一月頃の日記・断片と作品の叙述とを突き合わせ、従来『道草』が『吾輩は猫である』執筆当時の実生活の反映とされていた通説を覆し、お住と鏡子夫人、さらに健三と漱石とを詳細に比較しつつ、「当時の漱石自身の実生活を(直接に、赤裸々に)表現したとする通説は果たして当を得たものであろうか」⁽²⁾という問いを投げかけた。確かに作品の一部分に伝記的事実が投影されていた『道草』以前の作品とは異なり、『道草』には養父島田との出会いに始まり、金を渡してその要求を斥ける顛末も、また妻との日常も、作品全編に互つて伝記的要素がちりばめられていることは疑いもない。そしてこのことにより漱石が『道草』において(自然主義の領域に近づいた)⁽³⁾という評価が生まれたのは、ある意味で当然ともいえる。しかし作品に描かれている出来事が現実

の漱石の体験であるとして、その現実の体験を作品の素材として選
び取っていったのは他ならぬ漱石であり、相原氏の指摘するように
「むしろ、これらの素材がどういう過程を経て作品化されたのか」⁽⁴⁾
を解明することこそ重要であろう。以上のことは物語内容に関して
『道草』に特徴的なことであるのだが、さらに重要なことは漱石の
幼少時から『道草』執筆時までの半生を投影された健三という人物
の物語が、健三自身による一人称の〈語り〉ではなく、『彼岸過迄』
以来の〈三人称の語り〉⁽⁵⁾によって語られているということである。
さらにこの〈語り〉の特徴として相原和邦氏や駒尺喜美氏は、登場
人物たちの中でもとりわけ健三に対して〈批判的〉な傾向を持つこ
とを指摘し、これを受けて藤森清氏は『道草』の〈語り手〉が「わ
れわれが三人称の語り手に慣習的に要求するような透明性から微
妙に逸脱し」「言説の背後に実体的な存在を感じさせてしまう」「三
人称の語りとしては逸脱的な、過剰な言説」⁽⁶⁾が存在することを指摘
した。しかし〈三人称の語り〉だからといって必ずしも「透明」で
ある必要はなく、『三四郎』の〈語り手〉のように自らの価値観を
押し付け、登場人物も気づかないことを指摘し、気ままに物語に介
入してくる〈三人称の語り〉は存在する。また〈語り手〉が登場人
物の一人であるとかかわらず、〈語り手〉が「実体的な存在」
であるように感じられるということは、〈語り手〉のペルソナ

がある一定の傾向を持ち、その価値判断の根拠を明確に指摘できる
ということである。まさにこれこそが『道草』の〈語り手〉の持つ
特徴なのだ。

一方の極に『吾輩は猫である』の一人称のイントルーシブ・ナ
レーター (Intrusive Narrator) がいて、その最も遠い地点にあるのが
三人称のイフェイスト・ナレーター (Effaced Narrator) だとしたら、
漱石の文学的営為とは、まさにこの両極の間を一人称、三人称とい
う人称の問題に加えて、饒舌で押し付けがましい〈語り〉から始まっ
て最終的に〈神の如き視点〉 (Omniscient Point of View) を採用し
た〈語り〉まで様々な振幅を持つ〈語り〉の手法を採用すること
によって小説を書くことになったといっているだろう。漱石は健三と
いう人物に〈自分自身の過去と現在〉を託した。そしてそれを語る
時に、〈批判的な語り〉が採用されたことの意味は何か。

一 第一章の果たす役割

漱石作品における冒頭の一文を含む第一章の果たす役割は、『吾
輩は猫である』から『明暗』まで、作品の方向を決定づける意味で
重要である。『道草』においても事情は同様で、実に多くの情報を
含んだ一文から始められている。

健三が遠い所から帰つて来て駒込の奥に世帯を持ったのは

東京を出てから何年目になるだらう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。彼の身体には新らしく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着してゐた。彼はそれを思ふだ。一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた。(一)

この健三が帰つてきた「遠い所」(同)をめぐつて、従来様々な議論がなされ、また実に多くの(漱石の課題)が明らかにされてきたことを、ここで繰り返すまでもないだらう(尚この節での引用は特記のない限り一章からのものである)。しかしここで作者漱石の体験を重ねるのではなく、あくまでも純粹に作品に寄り添うと、この「遠い所」という漠然とした言い回しが、その直後で「遠い国」という言葉によつて具体的なイメージを持ち始めてくる。さらに「東京を出てから何年目になるだらう」という言葉は、「故郷の土を踏む珍らしさ」という次の文章によつてかなりの歳月が経っていることが連想され、冒頭の一行は單純な疑問のみならず、再び東京に戻るまでの歳月の長さに対する(詠嘆)の意味もこめられていることが理解できる。さらに「新らしく後に見捨てた」という箇所と、また「遠い国の臭がまだ付着して」いるという箇所から、「遠い国」から帰つてきたのが最近の出来事で、それほど多くの時間が経過し

ているのではないことが理解できる。健三は自分に残る「遠い国」の名残の「其の臭」を忌まわしく思っているのだが、さらに(語り手)は「遠い国」へ行つていたことが、健三自身は自覺していないにも拘わらず、健三に「誇りと満足」を与えるものであつたことを示唆している。注意しなければならないのは、この「さうして其の臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた」という叙述が、健三の視点によるものではなく、(語り手)自身の感慨であるということだ。つまりこの時点で『道草』の(語り手)が、多くは健三の視点に寄り添いつつも、時として健三の内面に立ち入り、健三が無意識のうちに抱く感情をも見通して解説を加えることができることが明らかとなるのだ。そして何よりもこの冒頭の一文の主眼は、健三がどこから帰つてきたかということでもなく、またどこへ帰つてきたかというのでもなく、健三が故郷である東京に(再び帰つてきた)というところにこそ存在する。そしてそれが何年ぶりになるだらうという(詠嘆)と共に語られるのだ。そして(再び帰つて来た健三)が、「千駄木から追分へ出る通りを日に二返つゝ規則のやうに往来」する途上で、「思ひ懸けない人」と出会うことによつて、作品は本当の意味で開始される。

ある日小雨が降つた。其時彼は外套も雨具も着けずに、たゞ傘を差した丈で、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行つ

た。すると車屋の少しさきで思ひ懸けない人にはたりと出会つた。其人は根津権現の裏門の坂を上つて、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三が行手を何気なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。さうして思はず彼の眼をわきへ外させたのである。

これは『道草』論において、必ずといっていいほど引用される光景なのであるが、この「帽子を被らない男」(二)と出会うことによつて、健三の周辺に、そして健三自身の内部に様々なものが吹き出してきている。〈語り手〉は健三が見た光景を再現しつつ、さらに健三が「此男の眼鼻立を確かめ」た上で、「其人の傍を通り抜け」「真正面を向いた儘歩き出」したところで、今度は健三の胸に去来する意識を語り出す。我々読者は健三が「其人」と「縁を切」るという言葉が当てはまるような関係にあつたこと、さらに「其人」と「十五年」ぶりに再会したこと、さらに健三が「其人に出会ふ事を好ま」しく思つてはいないことを知らされる。そして「其人」とはかつて健三が「父」と呼んだ人であることが後に判明するのであるが、この劇的な出会いが、実は〈劇的〉という言葉から最も遠い静けさをもつて語られていることは重要である。この出会いの形は他の漱石作品と比べて『道草』に特徴的なもので、例えば『門』のようにある漠然とした不安や恐れがあつて、徐々にその不安や恐れ

を引き起こす根源となる宗助とお米の〈過去〉が開示されるというのではない。まず何ものにも先立つて、健三の不安と苦悩の根源となるものが、作品の冒頭に生きた人間として現れてくるのである。健三は「其人」の服装や傘の素材までしっかりと見届け、さらに家に帰つてから「彼を見送つてゐた其人の眼付に悩まされ」てもいる。しかし健三はこの日「其人」と出会つたことを誰にも打ち明けずにおわるのであるが、〈語り手〉はそのことを次のように語る。

其日彼は家へ帰つても途中で会つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つてゐた其人の眼付に悩まされた。然し細君には何にも打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も黙つてゐる夫に対しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

冒頭の一行の「世帯を持つ」という言葉から、健三が妻帯していることは理解されるが、ここでいきなり「細君」が登場し、しかも明らかに読者に対して健三夫婦の不仲を印象づけるような記述がなされていることには注意が必要であらう。「機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さない」のが健三の癖であるとしたら、健三が「細君には何にも打ち明けなかつた」ということは、この日健三は「機嫌が悪かつた」ということであり、もし健

三の機嫌が良ければ「其人」との出会いを妻に話したということである。つまり〈語り手〉は巧妙に〈実のところは健三は「其人」との出会いを妻に話したかった〉ということを仄めかしているのである。

『道草』の〈語り手〉はまず健三自身が気づいていないことを指摘するのみならず、先に引用した一章の最後の箇所のように、まず読者に健三とその細君の仲があまり良くないことを印象づけるような〈語り〉をする一方で、それにも拘わらず実は妻に打ち明けたいことを抱える健三をも示唆するのである。つまり読者がある一定の方向、ここでは健三夫婦の不仲を強調しつつ、その背後にある彼ら自身も気づいていない感情や意識に光を当てるといふ重層的な〈語り〉を展開しているということである。しかしそれはまた同時に、強く作品に介入し、読者を誘導しているということでもある。一人の男との思いがけない出会いと、明らかに不仲を予想させる健三夫婦の日常と、第一章において語られた二つの出来事がどのように展開されてゆくのか。

二 健三が苛立つ原因

第一章においても一つ見落とすことができないのは、健三の身体に付着した「遠い国の臭」(一)を忌みつつ、同時にそれを誇り、

満足するという健三の心情と、さらに「斯うした気分を有つた人に有勝な落付のない態度」(同)で「規則のやうに」(同)千駄木から本郷までを往来するという健三の態度である。この〈忌むこととそれを誇ること〉、〈落付きがないことと規則正しいこと〉という〈矛盾した心情〉について水谷昭夫氏は次のように述べている。

彼の作品のありようは、言わば、この極めて矛盾した動揺の決して安らぎを得る事のない苦しみと孤独とを、常にその基調とし続けて来たものなのである。¹⁰⁾

確かにこの〈矛盾した心情〉は『道草』に固有のものではなく、例えば『門』において漱石は、穏やかであると同時に偶然と危険に満ちた日常を描き、その中に宗助・お米という人物を配する。かつて〈姦通〉という事件をひきおこした彼らは、〈姦通〉という言葉から連想される〈熱情〉とか〈劇的〉という言葉とは程遠く、平凡でつましやかな人物として形象され、彼らが引き起こした事件とその事件から派生した一連の不幸な出来事を彼らの罪の故に甘んじて受け止め、その罪の感覚に怯える人間である。ところが確かに彼らは自分たちが仕出かしてしまった事件の孕む罪の感覚を有しながら、その一方において世間の常識や禁忌を乗り越えて、「自分は一体誰を愛しているか」という意識に忠実に行動して〈愛を成就させたことを罪とされるのは「不合理」「不可思議」(『門』十四)

と考える宗助・お米の姿を描いている。

また『行人』においては、妻お直に自分のすべてを理解してほしいと狂おしいばかりに希求する一郎という人物を描出する。希求しつつも〈過度に鋭敏な神経〉と〈優れた知性〉の持ち主である一郎は、妻お直との関係のみならず生きることすべてにおいて寸毫の偽りも許すことができない。そして彼はそのような自分の有り様こそが自身の心もお直の心をも抜き差しならない破壊に導いてゆくことにも気づいている。妻に癒しを求めつつ、その妻を追い詰めているのが自分自身であることに気づいた一郎の苦悩は、『塵勞』の章に集約されているといえる。

『こゝろ』においてすら事情は同様で、明治という時代にあつて、国を繁栄に導くものこそが、『道草』でいうところの「温かい人間の血を枯ら」(二三) すものに外ならないことを「先生」は知っている。そしてまた親友Kを温かな人間関係の中に引き戻そうと、自分の下宿に同居させ、Kに意見すべきところをKの苛立ち傷ついた心に逆らわないためにあえてKに合わせるという自らの言動が、「かつては其人の膝の前に跪ついたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです」(『こゝろ』上「先生と私」十四) という言葉に凝縮されるようにKを裏切る行為であつたことを「先生」は知っている。そしてKを死に追いやつたことを生涯の罪

として認識し、何もせず生きてゆくことを選ぶ「先生」の姿を描いてゆく。文明開化の実相とその底に潜む悲劇の双方を痛切に見つめた「先生」は、一通の遺書を「私」に託す。そして自らの時代に幕を降ろそうとするのだ。そしてこの『道草』において、〈矛盾した心情の動揺〉の中で健三は常に苛立っている。彼を苦しめる現実上の問題が眼前にある時はもちろんのこと、「平生の我」(九) に戻り、「静かに流れ」(同) る時の中に身をおいている時でさえ、彼は絶えず苛立ち、苦しんでいるのだ。一章において姿を現した養父島田と、二章で回想される養母お常のことを健三は次のように考えている。

彼は此長い手紙を書いた女と、此帽子を被らない男とを一所に並べて考へるのが大嫌ひだつた。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となるからであつた。(二)

まさに前節で指摘したように、『道草』においては健三の不安と恐れと不愉快の根源となるものが作品の冒頭から生きた人間となつて現れているのであるが、注意しなければならないのは、二度目に島田と会つた時「とても是丈では済むまい」(同) という「変な予覚」(同) に襲われつつも、「幸ひ彼の目下の状態はそんな事に屈託してゐる余裕を彼に与へなかつた」(同) という健三の状態である。

幸ひ彼の目下の状態はそんな事に屈託してゐる余裕を彼に

与へなかつた。彼は家へ帰つて衣服を着換へると、すぐ自分の書齋へ這入つた。彼は始終その六畳敷の狭い畳の上に自分のする事が山のやうに積んであるやうな氣持であるのである。けれども實際から云ふと、仕事をするよりも、しなければならぬといふ刺激の方が、遙に強く彼を支配してゐた。自然彼はいら／＼しなければならなかつた。彼が遠い所から持つて来た書物の箱を此六畳の中で開けた時、彼は山のやうな洋書の裡に胡坐をかいて、一週間も二週間も暮らしてゐた。(同)

「帽子を被らない男」(同)の出現が「彼の不幸な過去」(同)を一挙に呼び起こすものであるにもかかわらず、「そんな事に屈託してゐる余裕」(同)がないのは、仕事をしなければならぬという刺激に強く支配されていることに起因していることがここで明らかにされるのだ。さらに三章では次のように語られる。

健三は實際其日々々の仕事に追はれてゐた。家へ歸つてからも氣樂に使へる時間は少しもなかつた。其上彼は自分の讀みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考へたい問題を考へたりしたかつた。それで彼の心は殆んど余裕といふものを知らなかつた。彼は始終机の前にこびり着いてゐた。娛樂の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙がしがつてゐる彼が、ある時友達から謡の稽古を勧められて、体よくそれを断つたが、彼

は心のうちで、他人には何うしてそんな暇があるのだらうと驚ろいた。さうして自分の時間に対する態度が、恰も守銭奴のそれに似通つてゐる事には、丸で氣がつかなかつた。(二三)

引用が少し長くなつたが、先の二章からの引用と右の三章からの引用の箇所から、健三の従事している仕事について、まず「遠い所から持つて来た書物」「洋書」(二)という箇所から健三が外国へ留学してゐたことと、健三の仕事が家に歸つてから主に「自分の書齋」で行われることや、「読みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考へたい事を考へたり」したいという箇所や、「世の中と調和する事の出来ない偏屈な学者」(四十七)という記述から研究者であること、また二十九章と四十五章での若い青年との会話や、五十一章の「明日講義もまた纏まらないのかしら」(五十二)という箇所から健三が大学で教鞭をとつてゐることが明らかとなる。この段階で漱石の私生活がある程度知つてゐる読者であれば、東京帝国大学講師であつた漱石と健三を重ね合わせることが可能となる。さらに健三の大学教員という現在の仕事と境遇が、「長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければならぬ」(九十一)という決心をして、健三自身が「牢獄」(二十九)に譬える「学校」(同)と「図書館」(同)で長い修業を積んだ結果、手に入れたものであることが明らかとなるのだ。しかもその結果健三自身が「彼の

位地も境遇もその時分から見ると丸で変つてゐた。黒い髭を生して山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた」(一) というのである。さらに健三は「時々宅へ話しに来る青年」(四十五) から「あなただつて些とも過去に煩らはされてゐるやうには見えませんよ。矢つ張り己の世界は是からだといふ所があるやうですね」(同) と評されてもいるのだ。「健三の焦りは大学教授という仕事をめづつておこつたものである」⁽¹⁾ことを指摘したのは飯田祐子氏であつたが、現在の健三の大学教員という境遇は、まさに立身出世を目指して研鑽を積んだ結果手に入れた地位であり、留学までして東京に戻つてきた健三が当面悩むのは、養父島田の出現でもなく、姉の送金の増額の願ひでもなく、まさに「仕事」(二)を「しなければならぬ」といふ刺激(同)、すなわち何事かを成し遂げようという志を貫かねばならないという焦燥感に外ならない。まさに『こゝろ』の「先生」の「我々は實際偉くなる積でゐたのです」(『こゝろ』下「先生と遺書」十九章)という言葉が想起される箇所である。(語り手)はさらに健三の現在を次のように語る。

自然の勢ひ彼は社交を避けなければならなかつた。人間をも避けなければならなかつた。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなる程、人としての彼は孤独に陥らなければならなかつた。

彼は臆氣にその淋しさを感じる場合さへあつた。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるといふ自信を持つてゐた。だから索寞たる荒野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それが却つて本来だとはばかり心得てゐた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思はなかつた。(二三)

ここで〈語り手〉は、健三の進んでいる路が「温かい人間の血を枯らす」ものであることと、それがとりもなおさず健三自身が望んだ立身出世が達成されたところから導き出されたものであることを指摘する。そして皮肉なことに彼が立身出世の果てに手に入れた境遇こそ、健三の過去に連なる人々を健三に引き寄せる原因となつてゆくのである。

三 健三に群がる人々

健三には「一人の腹達の姉と一人の兄」(二三)がいて、「親類と云つた所で此二軒より外に持たない彼」(同)は、また同時にその親類たちから「変人扱ひ」(同)されていることを自覚している。確かに健三は「昔しこの世界に人となつた」(二十九)はずであるのだが、その後自らの努力と精進によつて「この世界から独り抜け出し」(同)、親類と疎遠になつてゐることを「余り気持の好いものではない」(二三)いと考へつつも、「教育が違ふんだから仕方がない」

(同) という理由で、「変人扱ひ」(同) されていることを「大した苦痛に」(同) 感ずることなく過ごしているのだ。現在の健三にとつては、「親類づきあひよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた」(同) ためである。その健三がそれまで「親しく往來をしてゐなかつた」(同) 姉の許を訪れたのは、最初の出会いから六日後に再び同じ場所、同じ時間に「帽子を被らない男」(二) と遭遇したからであつた。姉については、四章から八章、二十四章から二十八章、六十七章から六十九章、そして百一章において語られているが、健三が回想する姉の姿は次のようなものである。喘息持ちであること、非常な癪性であること、落付きのながさつな態度であること、喋舌る事の好きな女であること、喋舌り方に品位がないこと、客の顔さえ見れば時間に関係なく何か食べさせなければ承知しない女であること、無筆であること、夫思いであること、子供を亡くしていること、縫針の道を心得ていないこと等、夫思いであること以外にいずれも負のイメージのつきまとうものであるのだが、「古ぼけた家」(三) を訪ね、欄間にかかっている「古ぼけた額」(四) に目を留めたことを契機として「子供の時の自分に明らかな記憶の探照灯を向けた」(同) 健三が思い起こす昔の姉と自分の姿は、それほど冷ややかなものではない。健三は姉を「不断から軽蔑」(六十七) しており「自分とは大変懸け隔つた」(同) 存在と考えつつも、同

時に「久しく会はなかつた姉の老けた様子」(五) を確実に受け止めているし、また何事につけても利かぬ気の姉が体よく夫に騙されているのを知り「不憫に思」(同) っているのだ。姉の夫比田についても同様である。三十年連れ添つた妻に「たゞの一つ優しい言葉を掛けた例のない男」(二十五) であること、「自分の都合より外に何にも考へてゐない」(二十六) ことを見抜き、冷徹にその人となり进行分析しながら、「二人して能く座敷の中で相撲をとつては姉から怒られた」(四) 話にしても、屋根の上で無花果を食べて「其皮を隣の庭へ投げたため」(同) 隣人に怒鳴りこまれた顛末にしても、考えるのもうとましいといった類いの思い出としては語られていない。逆に當時を回想する現在の健三は「夫程世話になつた姉夫婦に、今は大した好意を有つ事が出来にくくなつた自分を不快に感じ」(同) てもいるのだ。

兄についても同様である。兄については二十四章から二十八章、三十章から三十七章、六十六章、百章、百二章において語られるが、健三が回想する兄の姿は「派手好で勉強嫌」(三十四) の怠け者で、「三味線を弾いたり、一絃琴を習つたり、白玉を丸めて鍋の中へ放り込んだり、寒天を煮て切溜で冷したり、凡ての時間は其頃の彼に取つて食ふ事と遊ぶ事ばかりに費やされて」(同) いたというものである。そして現在の兄は相変わらず小役人のままで、三人の子供

がいたが「最も可愛がつてゐた徳領の娘」(同)を悪性の肺結核で亡くし、その治療のために財産を使い尽くして、健三の袴を借りなければ葬式の供にも立てないような境遇にある。また「最初の妻を離別」(三十六)し、「次の妻に死なれ」(同)、三度目に自分の気に入った妻を娶ったという経緯を持つ。当の兄自身が「自業自得」(三十四)と語るように、健三も若い頃の放蕩と遊興とが現在の落ちぶれた兄を形作っていると断じつつも、結核で亡くした娘の生年月日を静かに口のうちに読む兄の悲哀を確かに受け止めているのだ。

人間が邪悪なものであると同時に、美しく可能性に満ちたものであることを、その作家的営為の始めから漱石は繰り返し描いている。例えば『草枕』第一章で「余」が口ずさむシェリーの「雲雀」八十六行から九十行にかけての一節を、「前を見ては、後へを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ。腹からの、笑といへど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」⁽¹²⁾と訳した漱石には、人間と人間が生きる現実の孕む矛盾⁽¹²⁾が見えていた。この〈矛盾〉こそ、『道草』における健三自身の姿であり、健三が回想する人々の姿そのものである。

懐かしく、ほろ苦いような少年期の記憶がよみがえったのもつかのま、姉が持ち出すのは、月々健三が送る小遣いの値上げの要求で

あった。健三は再び現実に取り戻されるのだ。確かに現在の健三は、姉をはじめとして、比田、兄、島田、といった「血と肉と歴史」(二十四)で結び付けられた人々に対して、あらゆる面で「優者」(同)となっている。彼らは老い、おしなべて「頹廢」(同)と「凋落」(同)の色を見せる人々である。彼らは「優者」(同)となった健三に金を無心し、時間を浪費させ、何よりも〈自分の論理〉に健三を従わせようとする。自分の身につけた教養も知識も、一切が役に立たないような地平に健三は引きずりおろされていくのだ。何故ならその地平こそが、彼が自力でそこを「脱け出」(二十九)すまで、生きていた場所だからである。

健三は自分の背後にこんな世界の控へてゐる事を遂に忘れることが出来なくなつた。此世界は平生の彼にとつて遠い過去のものであつた。然しいざといふ場合には、突然現在に変化しなければならぬ性質を帯びてゐた。(二十九)

老いて凋落の翳りを見せる人々は、平生の健三にとっては遠く隔たった世界に住む過去の人々であると同時に、健三の前に相も変わらぬ生活を展開させる現在に生きる人々でもある。つまり現在の健三は「一人で世の中に立つてゐた」(三十三)昔の健三ではない。一人ではないその代償として健三はあらゆる塵勞を背負つて、苛立ち、苦しみ、一層の孤独感に悩まなければならないのである。か

つて『こゝろ』の「先生」が「私」と出会うまで妻「静」と共に時には芝居見物や旅行に出掛け、また世の中の嫌なことを避けて（何もせずに生きていた）ように、健三が正視することを避け続けたものが、このやり切れない日常の塵勞の中に、ようやく姿を見せ始めようとする。過去の「其行き詰り」（三十八）にある「大きな四角な家」（同）であり、「櫺子窓の付いた小さな宅」（三十九）である。そして執拗なまでに繰り返される呪詛にも似た（お前は「体誰の子なのか」という問いかけである。

十五章は、「健三は昔其人に手を引かれて歩いた」（十五）という一文をもって始まっている。幼い健三のために誂えられた洋服、フェルトの帽子、尾の長い金魚、武者絵、錦絵、健三の体にあつた緋緘の鎧と兜、いつも抜けなかった脇差し、船遊びと河豚の腹。そのいずれの光景も健三にとっては遠い幼い日の、懐かしくも胸が騒ぎ立つような記憶である。そればかりではない。「櫺子窓の付いた小さな宅」（三十八）で痘瘡を病んで、体中をかきむしって泣き叫んだことも、釣り上げようとして逆に引きずりこまれそうになり、あわてて竿を放り出し、翌日水面に浮いていた緋鯉を怖がったことも、健三の胸の奥にしまいこまれた懐かしい記憶であつた。これらの記憶のすべてが「どれもこれも決して其人と引き離す事は出来なかつた」（十五）ことを認識しつつ、その記憶のうちに「必ず帽子

を被らない男の姿が織り込まれてゐるといふ」（同）そのことが健三を苦しめるのである。当時子供の無い家に養子を迎えるということは、ゆくゆくは家を継がせ年老いた養父母を養うことを意味したから、島田やお常の要求は決して非常識なものではない。しかし健三は「幼少の時分是程世話になつた人に対する当時のわが心持といふものを丸で忘れて」（同）いることを「然しそんな事を忘れる筈がないんだから、ことによると始めから其人に対して丈は、恩義相應の情愛が欠けてゐたのかも知れない」（同）とさえ考えているのだ。しかし「そんな事を忘れる筈がないんだから」（同）という一文は重要である。つまりここで健三は養子に出された自分と育ててくれた島田夫婦に対して、《通常であればその恩義相應の愛情を抱くものだ》と一旦は考えていることを明らかにする一文であるからだ。ところが島田の出現は幼い頃の記憶の一切が愛に基づく無償の行為ではなく、あからさまな見返りを期待された行為であつたことを改めて健三の記憶に蘇らせる契機となるものであつたのだ。そして島田夫婦は健三に「御前の御父ツさんは誰だい」「ぢや御前の御母さんは」（四十一）という問いかけを繰り返す。この問いの残酷さは、「島田夫婦が彼の父母として明瞭に彼の意識に上つた」（三十九）頃から執拗に繰り返されているという点にある。つまり健三の意識に自分の父母が島田夫婦であることが記憶されてから、「ぢや

御前の本当の御父さんと御母さんは」（四十一・傍点論者）という問いによって、その記憶に対する疑惑と訂正とを健三に迫るものであったことだ。『彼岸過迄』において、市蔵の父が死ぬ三日前に語った「おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくつちやならないぞ。知つてるか」（『彼岸過迄』「須永の話」三）という言葉や、「兄さんとは決して呼ばなかった」（同四）夭逝した妹のことや、「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通り可愛がつて上げるから安心なさいよ」という母の言葉が、「両親に対する」（同三）市蔵の記憶を「生長の後に至つて、遠くの方で曇ら」（同）し、自分が父の子ではあつても母の本当の子供ではないことを確信したように、まさに健三にとって（繰り返されたこの問い）は健三が両親と考へていた島田夫婦以外に本当の両親が存在するという事実を突き付けるものであったのだ。「ちや御前の本当の御父さんと御母さんは」という問いは、健三にとって自明と思われていた出生にまで溯る（過去を消すこと）を迫られていることであり、まさにそれは（自分の依つて立つところを否定する）問いであつたのだ。嫌悪すべき過去は、現在の健三を形作り、その現実と決定的な関わりを持つてくる。まさに健三の回想は（生きているものを規定してくる）のである。さらに健三は次のように考える。

「彼は斯うして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたやうな一句を眼の前に味はつた健三は、自分は果して何うして老ゆるのだらうかと考へた。彼は神といふ言葉が嫌であつた。然し其時の彼の心にはたしかに神といふ言葉が出た。さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強欲な老人の一生と大した変りはないかも知れないといふ気が強くした。（四十八）

自分と「大した変りはない」（同）のは、一人島田に限らない。兄については、健三は次のように語る。

「自分も兄弟だから他から見たら何処か似てゐるのかも知れない」

斯う思ふと、兄を氣の毒がるのは、つまり自分を氣の毒がると同じ事にもなつた。（三十七）

姉については次のようである。

さう思ふと自分とは大変懸け隔つたやうであつて、其実何処か似通つた所のある此腹達の姉の前に、彼は反省を強ひられた。

「姉はたゞ露骨な丈なんだ。教育の皮を剥けば己だつて大した変りはないんだ」（六十七）

健三が憎み嫌悪する周囲の人々と、自分はさして変わりはないのだという認識は、『行人』で一郎が手に入れた「何んな人の所へ嫁に行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ

僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない」『行人』『塵勞』五十二)という認識と同じである。しかもそればかりではない。何よりも健三は島田を「憐れ」(四十八)と感じ、また「気の毒な人」(同)と考えているし、お常に対しても姉について考えたのと同じく「ことによると己の方が不人情なのかも知れない」(八十七)と考えている。そしてこの時健三は、兄の「淋し」(三十七)さを理解し、「姉の凹み込んだ眼と、瘦けた頬と、肉のない細い手とを、微笑しながら」(六十八)見つめる視点をも獲得しているのだ。

四 健三とお住

一方健三と妻お住との関係であるが、作品第一章の末尾において「話したいことがあっても黙っている夫」と必要以上には口を利かぬ妻」という会話らしい会話が殆どない夫婦のイメージを読者に植え付けている。ところが作品は健三の《過去》の回想部分を除いて、その殆どが妻お住との会話から成立していることに注意が必要であろう。

そもそも健三の回想は島田夫婦にまつわる記憶が語られる一章、十五章、三十八章から四十三章、姉や兄に関する記憶が語られる四章、三十三章から三十四章、百章、実父に関する記憶が語られる五十七章、九十一章、ロンドンから帰朝した当初の様子が語られる五

十八章、五十九章、妻の実家との関係が語られる五十五章、七十三章から七十六章と五つに分類することができる。それ以外には健三が島田に出会った日から年が明けて一月の半ばまでの小説的現在において、島田の来訪の様子を語る十六章、十七章、二十二章、二十三章、四十六章、四十七章、四十八章、四十九章、五十六章、八十九章、九十章、お常の来訪を語る六十二章、六十三章、八十七章、八十八章を除いて、九章から十一章、十八章から二十三章、三十章から三十三章、四十四章、四十七章、五十二章、五十三章、五十六章、六十章、六十一章、七十章から七十二章、七十九章から八十一章、八十四章から八十六章、九十二章から九十六章、九十八章、九十九章、百二章の中の二十一場面において、健三とお住の会話が展開されているのだ。

健三とお住の関係は、九章から十一章にかけて語られる健三が風邪をこじらせて寝込む場面に集約されている。

気分を変へるため四時頃風呂へ行つて帰つたら、急にうつとりした好い氣持に襲はれたので、彼は手足を畳の上へ伸ばしたまゝ、つい仮寝をした。さうして晩飯の時刻になつて、細君から起される迄は、首を切られた人のやうに何事も知らなかつた。然し起きて膳に向つた時、彼には微かな寒気が背筋を上から下へ伝はつて行くやうな感じがあつた。その後で烈しい嘔が二つ

程出た。傍にゐる細君は黙つてゐた。健三も何も云はなかつたが、腹の中では斯うした同情に乏しい細君に対する厭な心持を意識しつゝ箸を取つた。細君の方ではまた夫が何故自分に何もかも隔意なく話して、能動的に細君らしく振舞はせないのかと、その方を却つて不愉快に思つた。(九)

ここからまず読み取れることは、お住もまた健三の噓に気付いてゐるということである。この健三の噓をめぐつて、健三はお住が噓に對して何も言わないことを不満に思つてゐるし、お住もまた健三が自分から具合が悪いことを打ち明けてほしいと考えてゐるということである。つまり健三とお住の二人は決して口に出さないが、(相手の方から歩み寄つてほしい)と考えてゐる点で、全く同じことを相手に対して要求しているということだ。お住は自分が「夫を打ち解けさせる天分も技量も自分に充分具へてゐないといふ事實には全く無頓着であつた」(十四)し、健三もまた(過去)から抜け出し(現在)の自分の地位を築き得たという「誇り」(九十一)を抱くと同時に「他と反が合はなくなるやうに、現在の自分を作り上げた」(同)ことに「丸で氣が付」(同)いてはいない。そして以後一貫して二人は、相手の出方次第で良い夫にも良い妻にもなれるというやうに、自分たちの抱える欠点には目をそむけ、常に相手に非があることを主張する。例えば十一章において、島田の代理人の

吉田寅吉に会うかどうかをお住が健三に尋ねる場面において、(語り手)は発話されなかつた健三とお住の心情を含めて、次のやうに語る。

「来るだらう。どうせ島田の代理だと名乗る以上は又来るに極つてゐるさ」

「然しあなた御会ひになつて？若し来たら」

実をいふと彼は会ひたくなかつた。細君はなほの事夫を此變な男に会はせたくなかつた。

「御会ひにならない方が好いでせう」

「会つても好い。何も怖い事はないんだから」

細君には夫の言葉が、また例の我だと取れた。健三はそれを厭だけれども正しい方法だから仕方がないのだと考へた。(十二)「会ひたくない」「会はせたくない」と同じことを考え、同じ判断を下しつつ、妻お住とは反対の行動を取る健三の姿を浮かび上がせてゆく。また復縁を迫る島田が「離縁の際」(九十五)健三から「島田へ入れた書付」(同)を金で買い取つてほしいという条件を最後に突き付けてきた時にも、同じことが繰り返されている。健三もお住も百円の金を島田に「遣らないでも好い」(九十八)と判断しつつ、お住の反対を押し切つて健三は金を渡すのだ。健三とお住は自分たちが直面している事態に對して、同じ判断を下し、同じこと

を考えているにも拘わらず、それぞれの重きを置く価値基準にお互いを従わせようとして、ことごとく対立してゆくのだ。

それにしても、お住が「黙つてゐる夫に対しては、用事の外決して口を利かない女」(二)であつたということは、「話しかけてくる夫に対しては、用事以外のことも話すことができる女」であるというのである。しかも〈語り手〉はお住がもし「尊敬を受けなければ、受けられる丈の実質を有つた人間になつて自分の前に出て来るが好い」(七十一)と考えていることを伝えるのみならず、「あらゆる意味から見ても、妻は夫に従属すべきものだ」(同)と主張する健三に「独立した自己の存在を主張しやうとする」(七十一)「新らしい点」(同)を備えた女性であることを語っている。それはつまり初めから無口であるとか、無愛想であるとかいう問題なのではなく、ましてや『行人』のお直のように〈互いに理解しあうことを放棄する〉のでもない。自分が今考えていることを正しく理解してほしいと願うからこそ、激しく主張し譲らないのである。〈理解されることを諦めた女〉は自己主張などしない。お住は健三の「強硬な態度の何処かに何時でも仮装に近い弱点がある」(五十四) ことを見抜いている。例えば緊張状態が極限に達した時に起こる「歌私的里」(同)も、「其原因は昔のやうに単純には見えなかつた」(同)にせよ、結局健三は「神の前に己れを懺悔する人の誠を以て」(同)お

住の「膝下に跪づ」(同)き、「慈愛の心」(同)をもつてお住を受け止めているということは、つまり健三が妻お住から徹底的に離反されることを恐れていることもある。健三もまた妻お住に全面的に自分を許容し、受け入れてほしいと望んでいるということだ。そのことを見抜いているからこそ、お住もまた〈夫に理解され、自分の望むやうに愛されることを願うのである。漱石は表面的には波風を立てず、お互いに全く違ふことを考えていても、それでよしとするような形式的な夫婦を描くことはしなかった。逆に『行人』の一郎、『道草』の健三とお住、また『明暗』のお延というように、〈愛する〉ということに徹底して誠実であらうとするが故に、相手に同じものを求めて苦しみ、悩む人間の〈等身大の男女の姿〉をこそ描いてゆく。そしてそれこそが、漱石が正しい意味で二十世紀的な作家である所以なのだ。

結

健三は立身出世を望み、努力のすえ「現在の自分」(九十一)の地位を勝ち取ったことを自覚している。ところが皮肉にもその努力こそが周囲との軋轢の原因となつていことに健三が気づいていないことを〈語り手〉は指摘する。しかも現実と様々な塵勞は、次から次へと健三の前に押し寄せてくるのである。これらの塵勞を前

にして健三の脳裏に浮かんだ「神でない以上公平は保てない」「神でない以上辛抱だつてし切れない」(九十六) という言葉は重要である。なぜなら健三は、どのような場面においても厳正に公正さを保ち、どのような苦難をも辛抱するような、そのような存在として「神」をとらえていることを明らかにしているからだ。ここである「神」とは精進することによって仏になれるという仏教的な「超越的絶対者」としてのものではなく、「人間はどれほど努力しても決して神にはなれない」という「神と人間との間の深い断絶」を前提とする「キリスト教」的な「超越的絶対者」としての「神」を指している。「神」というものが「人間の理想」を担うものとして存在しているとしたら、「人間」はまさに「理想とはほど遠い存在」すなわち「等身大」でありえないからこそ、人間にはどうすることもできない人生の矛盾が浮かび上がってくる。まさに「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない」(百二)のである。「道草」とは、その健三が「金の力で支配出来ない真に偉大なもの」(五十七)に出会うまでの葛藤と道筋を描いている。漱石がこの時期に、健三という人物に「自分自身の過去と現在」を託した理由はここにこそあるのだ。

註 (1) 森田草平『夏目漱石』甲島書林、一九四二年

(2) 相原和邦『道草』『漱石文学』塙書房、一九八〇年七月

(3) 奥野健男『道草』論「国文学」、一九五六年十二月

(4) 相原和邦『道草』前掲書

(5) 高木文雄『道草』論「国文学」一九七八年五月)氏は、復活した「三人称の語り」について、「それは一見『虞美人草』の方法に戻ったかのように思われる」が、「私心の塊り」であった「虞美人草」の「語り手」と異なり、『道草』では私心を極力排除し、「万人にひとしく光と熱とを注ぐ太陽のような在り方をさせている」と指摘している。

(6) 相原和邦(前掲書)氏は、登場人物への批判的傾向が「高次の立場からの作者の反指定」によるものと指摘する。「作者」ではなく「語り手」ではないか。

(7) 駒尺喜美『道草』論「則天去私」の完成『漱石 その自己本位と連帯と』八木書店、一九七〇年五月)氏は、登場人物への批判的な傾向が「もうひと廻り上から作者によって批判されている」と指摘する。ここでも「作者」という語が使われているが、確かにすべてをアレンジしているのは「作者」漱石なのであるが、これは「語り手」であろう。

(8) 藤森清『語り手の恋——『道草』試論——『日本の文学』2、有精堂、一九九三年

(9) 越智治雄『漱石私論』角川書店、一九七一年六月)氏は、「遠い所」から「帰る」ということについて、次のように述べている。「だからむしろ、漱石が修善寺の三十分の死を通じて遠い時空のあわいからまさに帰って来たことをこそ想起するほうがよい。大患以後の三つの長編には思えば確実に死の影が落ちていた。(中略)その漱石がいまあらためて、遠い所からの還路をたどろうとしている。存在の深い淵にただ一人で立った男にしても、帰ってくるのは日常、

まさにわれわれの言う人生を描いてないのだ」。さらに言うならば、健三はやり切れない日常の様々な塵勞を知っていた。知りつつも、なおその日常の中に、帰っていかうと決意するのである。

(10) 水谷昭夫『漱石文芸の世界』桜楓社、一九七五年六月

(11) 飯田祐子『道草』と自然主義における「金」の問題——小説家という（職業）——「国語国文学」七十四、名古屋大学国文学会、一九九四年七月

(12) シェリーの詩「雲雀」("To a Sky-Lark": *Shelly's Poetry and Prose*, Donald H. Reiman and Sharon B. Powers, New York: Norton, 1977) 八十六行から九十行にかけての一節は次のようなものである。

We look before and after

And pine for what is not:

Our sincerest laughter

With some pain is fraught;

Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

(本学助教授)